「肉」が後押しする狩猟行為―北海道における狩猟実践を通して―

宮本 魁人

キーワード：狩猟・肉食・生業・「マイナー・サブシステンス」・楽しみ

要　旨

本稿の目的は、狩猟者の活動を通して、現代において能動的に実践される狩猟行為の動機や背景について明らかにすることである。

まずは、本研究で対象とする「趣味狩猟」という狩猟行為を、人類学的な文脈である「マイナー・サブシステンス」に照らし、その概念との整合性あるいは相違点を明らかにする。さらに本論では、「趣味狩猟」の実態について筆者自身による狩猟実践などの参与観察を踏まえて、明らかにしていく。「マイナー・サブシステンス」と「趣味狩猟」の比較を踏まえて、現場でどのように狩猟者の人々が、「動物」という他者と関わりをもっているのか、といった狩猟者の動機に繋がるような「楽しみ」の諸相を捉えることを試みる。特に、狩猟行為で目的とされる「肉」という存在が、現場においてどのような性質と地位を有しているのかということに注目し、狩猟者らの存在論や動機への影響について確認していく。

また本稿は、6 章で構成される。

第 1 章では、コロナ禍を契機とする本研究が「自然」という空間、「動物」という他者に目を向けて行われることを示しながら、実施背景や、研究目的、手法を含めた調査の詳細について説明する。そのうえで、趣味性の高い狩猟活動がどのような実態をもち、そこに「肉」がどのように関与しているのかという研究設問を提示する。

第 2 章では、本研究の文化人類学的な先行概念「マイナー・サブシステンス」について言及したうえで、本研究が先行概念と比較してどのような立ち位置なのか明らかにする。

第 3 章では、本研究における地域・協力者・時期などの調査の概要を述べる。

第 4 章では、「自然」という狩猟現場のなかで狩猟者がどのように狩猟行為を実践しており、「動物」との関わりがどのように「楽しみ」となっているか、銃猟と罠猟のそれぞれの特徴について言及し、マイナー・サブシステンスとの比較を行いながら、その概要を述べる。

第 5 章では、狩猟行為において一つの目的でもある「肉」に関して説明する。

まず「動物」がどのような過程を踏みながら、「肉」へと変化するかについて、現場の情動を交えながら説明する。さらに、「肉」となった存在が生きていた「動物」存在とどのような相互関係にあるかについて、肉のもつ「情報」に注目しながら論じる。最後にそれらの変化や相互関係と密接に関わる「肉を獲る」という行為が、狩猟行為の動機や現場での振る舞いとどう関わっているかについて説明する。

第 6 章では、以上の調査や考察を通し、狩猟行為を支持する「楽しみ」や「肉」による働きかけ行為や性質について結論を述べ、本研究を総括する。